

アイリスの剣 4

小田マキ
Maki Oda



レジーナ文庫



ブルーデンスの
家族

▲ リューノ(父)

▲ バーネス(弟)

▲ ティルディア(母)

▲ サスキア

翔国オルガイム王妃。
前の戦争を収めた救世主で、
ブルーデンスの憧れの人。

▲ ストレイス

ブルーデンスの兄。両親の手
で異形の怪物に変身させられ、
非業の死を遂げたが……

ヒラルダ▲

ブルーデンスの叔父。
漆国アイリスの宮廷医にして
一級魔術師でもある。
道化師のような奇抜な出で
立ちをしている。

ブルース▶

ブルーデンスの男装
した姿。性別を偽り、
騎士としてフォーサイス
の副官を務めていた。

ブルーデンス▲

フカッシャー公爵家の令嬢。
女の姿に戻ってフォーサイスと
婚約するが、両親の陰謀を
阻止するために再び剣を取る。

▲ フォーサイス

ブルーデンスの婚約者。
ダグリード侯爵家の現当主
にして、アイリス騎士団・
雷龍隊隊長を務める。

登場人物
紹介

目次

アイリスの剣 4

7

書き下ろし番外編

仕立屋と執事の安息

367

アイリスの剣
4

プロローグ

フカッシャー邸別館の一室。いつも騎士団の任務を終えた足で見舞っていたその部屋には、窓から夕日が差し込んでいた。

男になり、騎士として生きよ。

女に戻り、かんちよう間諜となれ。

彼の微笑みを守るため、彼を生き長らえさせるために、理不尽な命令に従って我が身を偽り、すべてを欺あざむいてきた。

それなのに、この手で彼の命を奪うことになったときは、どれほど打ちのめされたことか……生き返ってくれるなら、自らの命さえ差し出してもいいと、強く願った大切な人。「ストレイスお兄様」

その名を口にする、かつての惨劇などなかったかのような、穏やかな微笑みが向けられた。

夢にまで望んでいたはずなのに、ブルーデンスは目の前の光景が受け入れられなかった。彼の……優しかった異母兄の手が、血で赤く染まっていたから。

「ブルーデンス様、大丈夫ですか？」

よろけた身体を、氣遣わしげな声とともに後ろから抱き留められる。耳元で囁ささやかれた聞き覚えのある声に、ブルーデンスはビクリと震えて振り返った。

「……アウ、ラ？」

いつの間にか背後に立っていたのは、義姉と慕ったストレイス付きの侍女だ。肩に添えられた手はとても生々しく、温かかった。

「顔色がとても悪いですわ。さあ、おかけになって」

彼女が示した先には、兄がいつも腰掛けていた安楽椅子があった。先ほどまでは、確かに何もなかったその場所に。

「外地任務から戻ったばかりで、疲れているんだね。お前は本当に頑張り過ぎだよ。私のことばかりじゃなく、たまには自分の身体のことも考えなさい」

掛けられた声に再び兄を見遣ると、景色は完全に様変わりしていた。

赤い夕日は、穏やかな午後の日差しに変わり、兄の微笑みを柔らかく浮き上がらせている。寝台から降り、ゆっくりと歩み寄ってくる彼に、異形の面影は見当たらない。

求めていたはずの優しく穏やかな光景の前に、警鐘のような耳鳴りがした。

訊かなければ……質さなければならぬことがあるのに、耳鳴りが煩くて考えがまとまらない。脳裏に滲み出す白い霧が、疑念を覆い隠していく。目を開いたままなのに、なぜか兄の姿が霞んでよく見えない。

「……お兄、様」

「何だい、ブルーデンス？」

呼び掛けに答えた蜜のように甘い微笑みが眩し過ぎて、ブルーデンスは目を閉じた。

「……今日は、顔色がよろしいですね」

再び銀の双眸を開き、最愛の兄に向けてそう呼びかけると、不快な耳鳴りはピタリと止んだ。

なぜ、貴方は生きているのですか？

胸につかえていた疑問は得体の知れない幸福感に埋もれ、その口から発せられることはなかった。

第一章 悪夢の進撃

1

白昼堂々空から襲来した異形の軍勢は、王城ディオランサを混沌の渦に呑み込んだ。

辺りには緊急事態を告げる警報音が鳴り響いている。数千もの襲撃者達が、まるで死肉にたかる鴉のように、黒々とディオランサの上空を覆っていた。爛々と輝く赤い双眸や、知性を感じさせない血に飢えた顔は、ひどく禍々しい。

だが、彼らには少し前に消息を絶った仲間達の面影があった。

魔物のごとき漆黒の翼で旋回する軍勢と城の間は、波打つ透明な壁で隔てられている。湖面のような濡れた光を放つ壁は、ディオランサが備える魔障壁だ。彼の凄惨な戦争の後に、現宮廷医の提言によって設置されたものである。

周囲を人口の水堀に囲まれたディオランサは、小高い丘の上に造られた城塞だ。王族達の住まう宮殿を含む主塔に、文官達の執務空間である内郭、近衛師団の兵舎に武器庫

や兵糧庫、使用人の居住空間のある外郭^{がいかく}からなる。

三層構造の魔障壁は今、水堀の内側にある胸壁の前、主城門のある盾壁^{じゆんへき}の前、そして主塔の前と、各区域を完全に分離していた。

門前堀で守られた城の中では、別に深刻な問題が生じていた。が、鉄壁で守られた城の中では、別に深刻な問題が生じていた。

緊急事態に焦った見張りの兵が、魔障壁発動の操作手順を誤ったことが発端だった。

跳ね橋を引き上げる錘^{おもり}の鎖と同時に、緊急警報器に繋がる鎖を引き忘れていたのである。そのため、城の中に配置された兵達は襲撃に気付かず、戦力が分散されてしまった。

「城壁塔番は何を見ていたっ……一の隊はどこだ！」

胸壁の内側に立った近衛師団長メイスは、動揺する隊員達の前に怒号を上げる。

娘を死に追いやったブルーデンスを告発すべく、忌服^{きふく}の習わしを破って登城した彼は、皮肉にもこの襲撃に遭遇したのだ。ここまでの事態に発展する前に、リユーノ・フカッシャーの動向に気付かなかったことが悔やまれる。

城門周辺に配置された兵士の数は、あまりにも少ない。疎^{まば}らに集結した部下達は、入隊後間もない少年兵の姿が目立ち、本来なら王城を守るべき一の隊は、なぜか誰一人見

当たらなかった。

「一の隊は議会の間の警護に当たっておりましてので、宮殿内にっ……ただし、隊長は不在と思われます」

「なぜ一の隊が警護を？ それに隊長であるオックスがいなくて……？」

不幸中の幸いで共に行動していた副官^{せりふ}の台詞に、メイスは眉を顰^{しか}めた。定例の国務会議が行われていた議会の間の警護担当は、別の隊だったと記憶している。しかも、オックスが非番だという報告は、まったく聞いていなかった。

「フリード隊長は、昼前に請暇^{せいあ}を出してきました。雷龍隊所属の義弟と、連れ立って出て行く姿を見た者がおります」

その言葉に、メイスは瞑目^{めいもく}した。

オックス・フリードは、かつて雷龍隊に所属していた。義弟が雷龍隊の現隊員だったこともあり、オックスと雷龍隊は今も強い絆を保っている。五年前、雷龍隊に入隊したブルーデンスと入れ替わるように除隊し近衛師団へやって来たのだ。

その理由に、なぜ今の今まで気付かなかったのだろう。彼もまた、フカッシャー家と繋がっていたのだ。

稀代^{きだい}の悪女ブルーデンス……神官の息子でありながら上昇志向の強いオックスを陰謀

に加担させるのは、彼女にとって造作もなかったのだろう。シェブランカと名乗っていた年端もいかぬ少女時代から、すでに彼女は間諜としての役割を完璧に果たしていた。

四年という歳月をかけ、あの女は幼いゴーシャの心を邪悪に歪めたのだ。その上、後に雷龍隊長となった甥のフォーサイス・ダグリードをも洗脳した。

それはフカッシャー家の抱く野望、国家転覆のための布石。ゴーシャは、その薄汚い陰謀の犠牲者なのだ。

そして、かつての部下だと思われる襲撃者達の赤い瞳にも見覚えがある。彼の戦争において、メイスの胸に何度も剣を突き立てたクラウディア兵……その瞳に宿っていた禍々しきサクリファの色だった。

リユーノは宮廷医とオックスを通じ、騎士団と近衛師団の団員達をフカッシャー邸に誘い込み、サクリファの実験台にしたに違いない。

そう考えれば、すべてに筋が通る。

忌中に訪ねてきたヒラルダに見せられたゴーシャの記憶も、改竄されたものだったに違いない。フカッシャー邸別館を襲撃したのは、サクリファを植えつけられた角狼隊長ユージンで、ゴーシャは汚名を着せられただけだ。

陰で糸を引くのはリユーノ・フカッシャーだろうが、手を下したのはブルーデンスだ。

殊勝な顔をして罪を告白し、許しを請うたのはただの時間稼ぎ……フカッシャー公爵家は一致団結し、クラウディア皇帝が引き起こした悲劇を繰り返そうとしている。

怒りに打ち震えるメイスの耳に、ドンツという鈍い音が飛び込んだ。空気の振動が肌にビリビリと伝わり、弾かれたように顔を上げる。

見ればサクリファの軍勢が団子のように固まり、魔障壁へ体当たりをしていた。

衝突の度、血飛沫と黒煙を上げ、手足があらゆる方向に折れ曲がった姿で、何人もが落下していく。痛覚が麻痺しているのか、彼らは何度も何度も、躊躇いなく突撃し続ける。

かつての部下達による肉の砲弾の前には、戦争経験者のメイスでさえ、暫し呆然と立ち尽くした。

「……うつ、ううああああ……」

一人の少年兵の悲鳴が、メイスの意識を呼び覚ます。

腰を抜かして尻もちをついた彼は、震えながら後ろ手で這いずり、悪夢のような光景から逃れようとしていた。死人のように蒼褪めた顔は、大量の涙と鼻水でグチャグチャになっている。

「落ち着けっ！」

「……レイっ、レイがっ……！」

周囲の隊員達が彼の腕に手をかけ叱咤するが、彼は魔障壁の表面を流れる赤黒い血を見つめたまま、誰かの名を繰り返している。

無残に崩れ落ちる仲間の姿を見つけたのだろう。恐らくまだ十五にも満たない少年兵……実戦経験もない子供に、目の前の光景はあまりにも残酷だ。彼を中心として、周囲に動揺と恐怖がじわじわと伝染していく。

「総員配置につけっ、絶対に城壁を越えさせるな！」

メイスは怖じ気を吹き飛ばすように、号令を上げた。

恐怖に呑み込まれつつある年若い隊員達を含め、一兵卒たりとも欠くわけにはいかない。今ここで敵の侵攻を食い止めなければ、ディオランサだけでなくアイリスまでもが崩壊する。

かつての部下や同僚に剣を向けてでも……それができるのは、ここにいる自分達だけなのだ。

「城内に残る魔術師はっ……?」

メイスは、少年兵の身体を支える二の隊隊長に尋ねる。

「今日はアルダで魔術師団の大規模な集会がありましたので、城にはいないかと……ヒラルダ様も、昨日から登城記録がありません」

敵の用意周到さに、メイスは舌打ちしたくなる。

決して、偶然ではあるまい。国王、宰相を筆頭に上級文官が顔を揃える定例会議と、魔術師団の不在が重なるように仕組まれたのだ。魔術師団が一齐に城を空けても、危惧の声が出なかったのは、常に元宮廷魔術師であるヒラルダが残っていたからだ。

魔術師の一人もいないのでは、魔障壁の強度も推し量ることができない。おぞましき人間砲弾にいつまで耐え得るか、メイスには判断がつかなかった。

「……っ……あの、メイス様」

難しい顔で黙り込んだ彼に、先ほどの少年兵が呼びかけてくる。

「宮廷医様はこちらに向かっていると思われます……そのっ、多分ですが」

「どういうことだ？」

たどたどしく、歯切れも悪いその言葉に、メイスは怪訝そうに問う。

「サザール殿下が、そうおっしゃっていましたので」

「なにっ、殿下が……?」

「はっ、はい。侵入者が現れる直前、殿下をお見かけしたのです。侍女の格好をされていたので、すぐには気付けず……僕っ、いえ、私に魔障壁の発動を指示された直後、飛翔石スザーラを使って転移されてっ……あまりに突然のことで、お引き止めできません

でした！ 申し訳ありませんっ！」

足元で土下座する少年兵の言葉に、メイスは瞠目する。

国王夫妻、兄王子達とともに、宮殿内にいると思っていた第三王子サザール。変装の名人である彼には、警備の目をかいくぐって城を抜け出す悪癖があった。少年兵が会ったのは、本人と見て間違いない。

もしかしたら、サザールがヒラルダに深い信頼を寄せていたのは、長年かけて彼が仕向けたからかもしれない。奇抜な出で立ちも、人を食ったような言動も、サザールの目に留まるための演技だったとも考えられる。

王子は、国家転覆を目論む国賊達の手に落ちた。

メイスの背に、冷たい汗が流れる。

人間砲弾を浴び続ける魔障壁が、今では脱出不可能な檻のように感じられた。魔術師がいないのでは、それを解除する術はない。

「わかった、今はその罪過を糺している場合ではない。お前は持ち場につけ」

震えながら石畳に頭を擦りつける少年に、メイスは努めて冷静な声で命じた。

ただでさえ、皆が恐怖に縮み上がっている。今は推論を述べるときではない。これ以上の混乱を招くことは、自滅に等しい。

「はい、申し訳ありません！」

少年兵は立ち上がると、ふらつきながら城壁に穿たれた見張り窓の一つにとりつく。

その背中が気の毒なほどに小さく、頼りなかった。

真実を伏せたまま、部下達に過酷な任務を強いることに罪悪感を覚えながら、メイスは背後を振り仰ぐ。

そこには広大な外庭が広がっている。

中央には瀟洒な噴水があり、周りを囲む回廊は色とりどりの花木で彩られている。鼓膜を震わす人間砲弾の音とはまったく無縁の、優美で平和な世界だった。それをおめめと穢されるわけにはいかない。

第二のクラウディア皇帝にならんとするフカッシャー親子の野望は、なんとしてもこの手で潰す。

それが薄汚い陰謀の犠牲になった亡き娘へ、メイスがしてやれる唯一の手向けなのだから。

門前堀の水は血で赤黒く濁り、白亜の城壁は薄汚れてところどころ崩れ落ちていた。焦土と化した芝地の上には、四肢の折れ曲がった屍が散乱していた。屍からは、漆黒の翼と赤い双眸がなくなっている。死んでサクリファの力が失われると同時に、肉体の強化も解かれるらしい。

魔障壁にぶつかると人間砲弾の衝突音は、いつまで経っても鳴り止まなかった。機械的に繰り返されるその音は、彼らに個の意思が存在しないことを告げているようだ。

死をもって人に戻った同胞達を顧みる者もいなければ、門前堀の外が濃密な霧に覆われていることに気付く者もいなかった。灰色の霧は、王城デイオランサと魔障壁、そしてサクリファの兵士達を、外界から遮断しているようにも見える。

不可思議な霧の向こうから、不意に新たな異形の集団が現れる。

『うげええつ……元副隊長じゃねえけど、胃にくるな、コレ』

『ジノよ、お前えは馬車酔いだけじゃなく、魔導石酔いまですんのかよ。つかえねえ奴』

『うっせえ、こちとらおたくと違って繊細なんだよ、ガサツハゲっ！』

『ハゲじゃねえつつてんだろ！ 毎朝刺つてくれてるヨメに謝れや、ゴラァっ！』

『デメエこそ何のノロケだ、独り身に対する嫌味か！ 俺は兄貴ささいればなあつ……』

『しいっ、これから奇襲だつていうのに声が大き過ぎますよ、馬鹿二人！』

殺伐とした空気をものともせず、野太い怒声を響かせる集団……背中に漆黒の翼を生やし、血のように赤い双眸を持つ彼らは、黙っていればサクリファの兵士達と見分けがつかなかった。

それは異形の扮装をし、奇襲をかけに來た雷龍隊の隊員達だ。その声もやけに甲高く、人外じみて聞こえる。

『お前らが相変わらず馬鹿なのはわかったから、少し口を閉じろ。そんな状況じゃない』
中で唯一の近衛師団員オックスは、いつもの喧嘩を始めたジノとエクトルに釘を刺す。

『……惨い』

そして、門前堀の縁に片膝を突いた彼は、血で濁った水の中に折り重なった死体を俯瞰し、短く呟いた。

『裁きの神へ奏上。彼らの所業は己の思惟にあらず。掌上の魂に安らかなる眠りを……』
そのままの体勢で膝頭に額をつけ、オックスは神官のように鎮魂詞を舌に乗せる。

毒で色の抜けた髪も黒く染め、異形の扮装をした今の彼は、純白の衣を纏う神官達とは対極の存在に見えた。

だが、神学を捨てて騎士になった経歴を知る仲間達は、誰もそのことを皮肉らない。オックスに倣って、皆が一時武器から手を放し、騎士の礼をする。

『重ねて奏上。これより我らが為す所業を、すべからく見るべし……これぞ正道なり』最後にそう結ぶと立ち上がり、彼は後ろを振り返る。

『さて、諸君。もう一度手順を説明しよう。まずは彼らの翼を奪って地上に落とし、それからサクリファを砕く。手心を加える必要はない。サクリファの力が働いている間、彼らの肉体はそう易々とは傷付かない。これは……』

『宮廷医殿とサザール殿下のお墨付きだから間違いない、でしょ。聞き飽きました。こういうのは、実践してみるのが一番なんですよ!』

長々と続きそうな説明を遮ったカインは、大きく右手を振り抜いた。

その手から放たれた小さな銀色の刃が、弧を描いて宙を飛んでいく。その刃が向かう先は、一つの塊となったサクリファ兵達だった。刃は縦回転しながら加速し、人間砲弾に迫る。

『ギャッ……』

魔障壁への衝突音に交じり、甲高い獣のような叫び声が迎りに響いた。

次いで三人の兵士達が、手足をバタつかせながら頭から堀に落ちていく。彼らの背に生えた皮膜のような黒い翼は、見るも無残に切り裂かれていた。上空から落下したサクリファ兵達は、派手な飛沫を上げて水堀に沈む。

『……む、なかなか頑丈ですね。それに、これだと引き上げるのに手間が掛かる。次からは芝の方へ落としましょう』

堀を見下ろしながら呟くカインの手には、サクリファ兵達の翼を奪った凶器が戻っている。まるで風車の羽根車のように刃先が四方を向いた、風変わりな仕掛けナイフだった。

『おい、カイン。私は手加減するなどは言ったが、溺れさせろとは言っていないぞ』同じく堀に赤い目を向けるオックスは、顔を皺めた。

背中の翼が水面への衝突の衝撃を和らげたらしく、落ちたサクリファ兵達は三人とも無事ようだ。しかし、使い物にならなくなった翼と水を吸った軍服が、彼らの浮力を奪っている。先に落ちていた仲間達の亡骸を掻き分け、浮上しようと必死にもがく彼らの姿は、見えていて気持ちの良いものではない。

『次から気を付けますって。エクトル、彼らの引き上げをよろしくお願いします』

オックスの苦言を軽くないしたカインは、隣で堀を覗き込んでいた大男にそう話を振

る。まったく悪びれていないところを見ると、敢えて水堀に落としたのだろう。城壁より高い場所から地べたに激突すれば、普通の人間ならただでは済まない。サクリファで強化された肉体の強度を、死なない程度に試したようだ。

『ま、四の五の言ってる場合じゃねえし、いいけどよ……マジで、お前とは差しで喧嘩したくねえな』

エクトルは元傭兵のしたたかさを心底実感したように眩くと、水堀で足掻く三人に向けて巨大な機械弓を構えた。

レバー式の引き金を引き、重々しい音を立てて射出されたのは、矢ではなく鋼の網だ。機械弓の先端に繋がった蜘蛛の巣のような網は、三人のサクリファ兵を的確に捕らえていた。

『おらよつと……!!』

掛け声とともに矢つた金具がついた台尻を地面に突き立て、弓をしっかりと足元に固定すると、エクトルは再び引き金を引く。すると、引き金の下に取り付けられた滑車が回転し、三人の身体は瞬く間に吊り上げられた。

『グギャツ……グググググ!!』

地べたに叩きつけられた衝撃で、サクリファ兵達は獣のような声を上げる。飛沫を撒

き散らしながらもがくも、網は彼らの四肢に一層絡みつくだけだった。

『無駄だ、そいつは灰色熊でも破れねえ特別製の捕縛網だ。足掻けば足掻くほど、身体に食い込むだけだぜ』

『さすがは非合法賭博場の元用心棒！ 生け捕りがお得意ですねえ』

『はっ、金踏み倒して逃げた奴らに死なれちゃ丸損だろーよ。しつかり、きっちり、ぼつたくりが基本よ』

『こら、最後のヤツ！ ……ってか、てめえら、今の状況考えてモノ言いやがれ！』

かつての技を披露し合う二人に突っ込むと、網の中でもがくサクリファ兵の前にジノが跪いた。

『すぐ楽にしてやるからな』

毒々しい赤色の双眸で睨みつけてくる三人に向け、そう眩くと、ジノは素早くダガーを振るった。

荒い息遣いと唸り声が途絶え、周囲に金属が碎ける甲高い音が響く。網目から突き入れられた刃先は、見事に三人の目に命中していた。しかも、他の部位は一切傷付けていないようだ。

『さすがは元いかさま師、手先だけは器用ですねえ』

茶々を入れるようなカインの言葉にジノが氣を削がれた間に、早くも變化が始まる。

三人が吐き出す呼気には、ザラザラとした異音が交ざっていた。

『ちよつ……これ、やばくねえか？』

ジノは血相を変え、余裕綽々だったカインも、焦ったようにオックスを振り仰ぐ。

対してオックスは、三人を注視したまま冷静に言う。

[illegible]

凄まじい叫び声の後、周囲は一瞬にして真っ白な水蒸気に覆われ、すえた臭いが鼻を

誰一人動かずに状況を見守っていると、薄らいだ煙の向こうには、煤に塗れた三人の身体が仰向けに横たわっていた。瞳を失った剥き出しの眼窩は血を流しておらず、筋肉も自然な状態に戻っている。

弱々しくも起伏を繰り返す胸部を確認し、隊員達はようやく安堵の吐息を漏らした。

『焦ったー……けど、これで一安心か。宮廷医殿、後でちゃんとなくなった目も何とかしてくれるんだろーな』

彼らの四肢に絡まった捕縛網を解きながら、エクトルがため息交じりに独り言ちる。前の戦争が終結した後、戦傷を負った人々のために義肢製作もしていたヒラルダは、サクリファ兵達の義眼を無償で製作するらしい。

『誰かと思ったらこいつ、アンバーじゃん。まだ金返してなかったんだよな。危うく踏み倒すところだったぜ』

三人のうちの一人が顔見知りだったことに気付いたジノは、昏倒する彼に自らの上着コートをかけてやった。

『あれ、随分前の話じゃなかったか？ ……つたく、お前、倍にして返してやれよ。ついでに、元気になったら飲みにも連れてつてやれ』

『言われなくても、わかっているよ。偽モンとはいえ、俺が目え潰しちまったからな』
 『ブルース……じゃなかった、元副隊長は、兄上のこんな姿を見てしまったんですね』
 エクトルとジノが言い合う隣で、複雑な表情をしたカインが呟く。
 『きつと、もっとひどかっただろうな。この兵達は生きているが、ストレイス殿はもういない』

そう返したのは、オックスだった。

雷龍隊副隊長であったブルーデンスが、異母兄を大事にしていたことは有名だ。ストレイスは、実の父によってサクリファの実験台にされた悲劇の人……ブルーデンスは、暴走した彼に自らの手で引導を渡したのだ。その心の傷は計り知れない。

『躊躇^{ためど}うな、感傷も捨てろつつたの、あんただろ！ 元副隊長はとっくに先行ってんだつ！ こんなところで足止めされてねえで、俺らもやることやらねえと……！』

依然として鳴り続ける頭上の衝突音と、重苦しい空気をかき消すように、ジノが吠える。

『そうだな、悩んでいる暇はない』

『……んだよ、てめえにそんなこと言われるなんてよ』

『ですね、そこだけちよつと引っかかります。でも、僕は何が何でも生き残って、この目で見てやりますよ……鬼隊長の結婚式つ！』

じわじわと士気が回復しかけていたところ、そのカインの一言が決定打となった。

『おおおー！ 見てえ、元副隊長の花嫁姿！』

『おっしゃーっ、気合入ってきた！』

『そりや確かに見たい……じゃなくて、こら！ 人がせつかくつ……』

周囲が一気に活気づく中、口火を切りながらも蔑^{ないがし}ろにされたジノが、再び吠える。

『うるさい、僕らには時間がないんですよ。あんたが言ったことでしょ、死人が増える！』

『うぐぐぐ……！』

『ジノ、いつまでもばやいてないで行くぞ……これより作戦開始だ！』

オックスは反論できず唇を噛むジノに言うと、背中の翼を広げた。

恐ろしげな鉤爪^{かぎづめ}で飾られ、濡れ光る漆黒^{しっこく}の皮膜は、一見偽物とは思えない。ヒラルダの呪術とサザールの魔法による、最高傑作だ。偽装を超えた逸品は、装着した者の意思通りに空を駆る。

先んじて地を蹴ったオックスに続き、彼らは次々と門前堀を飛び越えていった。偽装してサクリファ兵達の後ろから近づくが、意思を奪われた彼らは全く警戒しない。ただの殺戮兵器と化した彼らに、姿かたちの細かな差異は識別できないのだろう。忠実

過ぎるほど忠実に、魔障壁にその身をぶつけることに集中している。

オックスを始めとする遊撃部隊は、それぞれが得手とする武器を振るい、最後部の者達から次々と翼を奪っていく。サクリファ兵達のほとんどは、水堀ではなく焼けた芝の上に落下していった。

地上に残った半数の隊員達がその目のサクリファを砕く。誤って水堀に落ちた者達は、エクトルの放つ捕縛網で引き上げられた。

地道な作業だったが、彼らは確実に成果を上げていった。

3

オックスが率いる遊撃部隊が活動を開始した頃、ブルーデンスは宮廷医邸にいた。

極彩色の魔術師の屋敷と周囲の森には、あらゆる防犯措置が講じられている。それは、サザールが彼の力を引き継いだ今も健在だった。

許可なき人間の侵入を拒む「魔術師の森」が作られた本当の理由は、有事の際に王族達の避難場所にするためだったらしい。招かれざる者が一歩でも森に踏み入れれば、精神

を狂わせる罠が発動される。

最初に訪れた際、フォーサイスがその影響を受けなかったのは、彼自身がヴィノーラであり、瀕死のブルーデンスを腕に抱いていたからだ。彼の王宮舞踏会の夜に、ヒラルダはいずれ二人が屋敷を訪れることを予知し、森の罠を無効化する術をブルーデンスにかけていたらしい。

「……あつ」

「何だよ、チェイス？ この期に及んで忘れもんか？」

魔導石の埋め込まれた門扉を潜ったところで、小さく声を上げた彼に、ライサチェツクが怪訝そうに尋ねた。

「この前来たとき、何でオレ達は無事だったんですかね？ フォーサイス隊長達と違って、招かれざる客だったじゃないですか」

「この森に張られているのは、術士の死によって解ける類の術だ。あのときの宮廷医殿は返魂の儀を行って相当消耗していた上、冥界でもかなりの深手を負っていた。隊長達を地上に連れ戻すのが精いっぱい、森の罠にまで手が回らなかったんだろう」

チェイスの疑問にスラスラと答えたのは、サルークだった。その言葉は確信に満ちている。

「お前、随分詳しいな。そんな知識、一体どこで身に付けた？」

「……トライロードの経験ですよ。標的にしてた屋敷の中には、宝物蔵に魔術師や呪医を常駐させてる連中も多かったですから。自ずと覚えちゃったよ」

意外そうに尋ねたフォーサイスに、サルークは一瞬間を置いて答え、どこかばつが悪そうに目を逸らした。かつての盗賊行為を後ろ暗く感じているのか……刹那そう思ったが、ブルーデンスはその考えを打ち消す。

サルークが標的としたのは、不正に私腹を肥やす悪徳商人や貴族達で、盗んだ金品もすべて孤児院運営資金に回していた。伝説とまで言われたその手管を無駄に誇りはしないが、一片の悔いもないと、彼は常々言っていたのだ。

「さすが伝説の義賊、五百ラシクルの賞金首は伊達じゃあねえな」

「よせ、ライサ。今の俺の首に、そんな価値なんざない」

ライサチェックの軽口を短くいなした口調からも、いつもの覇気は感じられない。

「サルーク、何か悩みでもあるのか？ 今日様子がおかしいぞ」

ブルーデンスは、どこことなく精彩を欠く彼に尋ねる。

「悩みはない……とは言えないな。本人を前にして言うのは、少々気が引けるが」

「私が悩み？」

ブルーデンスはその言葉に瞠目するが、少しばかり得心がいった。

今日のサルークは常以上に無口で、ブルーデンスの視線を避けているようだった。自分を視界に捉えかけると、彼の左目が不自然に逸らされていたのだ。

決して陽気な性質ではないサルークではあるが、こんなよそよそしい態度を取られたのは初めてだった。

「どういことだ、サルーク」

フォーサイスも険しい表情で問うた。

「先日、隊長から出された宿題ですよ……元副隊長の呼び名。もうブルースとは呼べないし、どうしたものかと」

「……そう言えば、そんなことも言ったな」

小さく苦笑して言ったサルークに、フォーサイスも心当たりがあったようだ。

ブルーデンスは彼の言葉に肩の力が抜けたものの、自分の呼称がどうしてそんなに彼を悩ませたのかはわからなかった。

「別に公の場でなければ、私はブルースでも……」

「そりゃ駄目に決まってるだろ」

彼女の提案を、ライサチェックが食い気味に否定する。

「常日頃からクセつけとかねーと、絶対に誰かがボロ出さず。特にこいつは、平気で副

隊長とか言いそーだしよ」

「なっ、そこまで粗忽者じゃありませんよ！」

それはもつともな理由だったが、引き合いに出されたチェイスは憤慨したような声を上げた。

「大体、何を悩む必要があるんですっ？ ブルーデンス姫でいいじゃないですか」

「却下だ」

「ええっ？ 早っ……！」

チェイスの挙げた案を、今度はフォーサイスが瞬殺する。その顔は先ほどよりも二割増し厳めしく、不愉快そうだ。

男として生きてきた時間が長過ぎて、姫と呼ばれるのに抵抗があることは認める。けれど、フォーサイスがどうしてそこまで力いっぱい否定するのか……チェイスと一緒に、ブルーデンスも首を傾げてしまう。

「ちと早えが、ダグリード夫人か奥方でいいんじゃないの？ それしか浮かばねえし」
「待て、いくらなんでもふざけてるっ……」

まるで揶揄するようなライサチエックの言葉に、ブルーデンスは咄嗟に非難の声を上げた。

が、フォーサイスはそれまでの引きつった表情を緩め、満足げに頷いた。

「それでよからう」

「フォーサイス様までっ……ダグリード侯爵夫人は、まだエルロージュ様ですよ？ 気が早過ぎます」

「何を言ってる、ブルーデンス。母上はすでに前侯爵夫人だろうが。俺が跡をついで何年になると思ってるんだ……いい加減、お前に自覚を持たせるためにも、今のうちに呼び名から慣れておくのもありだな」

諫めるブルーデンスに、フォーサイスが至極もつとらしく言ってくるが、どうにも屁理屈にしか聞こえない。

「じゃあ、ダグリード夫人で決まりだな」

「俺も異論はない。よろしく、奥方」

「奥方様かあ……何だか、ちよつと気恥ずかしいですね」

明らかに面白がっている元部下三人の様子に、ブルーデンスは怒りと恥ずかしさからわなわなと震える。いくらなんでも、あんまりな仕打ちだ。だが……

「というわけだ、慣れろ……妻よ」

怒声を上げようとした瞬間、不意打ちで微笑みかけてきたフォーサイスの一言に、一

気に腰砕けてしまった。

「お願いですから勘弁してください。今日一日、使い物にならなくなります……！」
紅潮した頬を隠すようにフォーサイスの肩に顔を押しつけ、腕に縋^{すが}って弱々しく懇願する。国を揺るがす大事が起こっているときに、呼び名一つに動揺する自分が嫌だった
が、ブルーデンスにはどうしようもなかった。

「……悪かった。今日のところは今まで通りでいこう、ブルーデンス」

袖をギュッと握り締めていた彼女の手に自らのそれを重ね、フォーサイスはため息交じりに謝罪してきた。

「いえっ、こちらこそ大変な状況で醜態を……！」

「醜態なものか、使い物にならなくなるのはこっちの方だぞ……恥じらう姿まで何でそんなに愛らしいんだ」

慌てて顔を上げ、未熟を託^{たく}びるブルーデンスに、彼は真顔でそう返してくる。

しかも囁^{ささ}くように潜^{ひそ}められた最後の言葉は不意打ちで、彼女は悲鳴を抑えるのが精いっぱいだった。至近距離から見下ろす妖しく輝く漆黒^{しじく}の双眸^{そうめく}に、さらに心が乱れてしまう。

「冗談通じねえし、暑くてかなわねえぜ。サルーク、お前が余計な話振っちゃったせい



だぞ」

「今回報かりは、素直に済まん……ところでチェイス、お前は見るにしてもちよつと遠慮しろ」

「いや、だつて……」

さらに煽るような二人のやり取りと、目を皿のようにした若者の好奇心旺盛な視線に、ブルーデンスは慌ててフォーサイスから距離を取る。

それでも、高鳴る鼓動ばかりはどうしようもなかった。

* * *

何やかやあった末、落ち着きを取り戻した五人はヒラルダ邸の寝室へと向かった。

目的のものは、ほとんど使われた形跡がないワードローブの中だ。嵌め込み式の床板を外すと、八角形の石造りの空間がポツカリと口を開ける。床には石畳がモザイク画のように敷かれ、それらの繋ぎ目からは虹色の光が漏れていた。

また、八角にそれぞれ配置された彫石には、一続きの神代の言葉が刻みつけられている。その空間こそ、王城ディオランサの宮廷救護室へと続く転送陣だった。

「ヒラルダが神出鬼没だったわけがようやくわかったぜ。職権乱用も甚だしいだろ、私用で使いまくりだ」

「そんな言い方ないでしょう、ライサさん！ 今はそのお陰で助かってるんだし……」
ライサチェックの不穏な軽口を聞き、チェイスが慌てたように言う。

「うるさいぞ……ガチガチになれとは言わんが、お前らはもう少し緊張感を持て」

フォーサイスは先ほどの自分を棚に上げ、不毛な応酬を始めた二人を軽く諷めた。

床下の転送陣を支える八本の石柱は、ヒラルダの化身である蝶が振り撒いていた虹色の鱗粉と同じ輝きを放っている。これは呪術によって作られた転送装置で、魔障壁の発動にも干渉されないらしい。

ヒラルダにそう聞かされていたものの、フォーサイスは傍らのブルーデンスを気遣うように見遣る。

「ブルーデンス、大丈夫か？」

押し黙ったまま転送陣を見つめる彼女の横顔に、問いかけた。

美しい銀の髪と瞳を持つブルーデンスは、つい最近まで魔法でその色を黒く変えていた。長きにわたる魔法偽装でビガンナーとなった彼女は、魔法が効き辛く、魔導石を使用すると体調を崩すらしい。

フォーサイスには、何の助けにもなれない。それがもどかしかった。

「大丈夫です、フォーサイス様。ヒラルダ……叔父様もそうおっしゃっていましたが、実際、水鏡の御婆に呪術で瞬間移動させてもらったときも、何ともありませんでしたから」ブルーデンスは微笑みながら言ったが、やはり心配なもの心配だ。彼女の大丈夫という言葉ほど信用ならないものはなく、慌て言い直した男の呼び方も気に食わない。「私にはフォーサイス様がついてくださっていますから、本当に大丈夫です」

フォーサイスの感じる苛立ちに気付いたのか、ブルーデンスはそう付け加えた。腰に携えた剣・ロードピースに、一瞬視線を落として。

両親の野望を止めるために命をも投げ出しかねない彼女へ、抑止の念を込めて渡した父アスターの形見の剣……それはフォーサイスにとって、他の何にも代えられない大切な物だった。その剣がある限り、ブルーデンスも自らの命を顧みない無茶はしないだろう。己の意図が正しく働いていることに、フォーサイスはわずかに安堵する。自らの分身のようにロードピースを握り締める彼女の姿は、健気で愛おしかった。

「……あの、作動させますよ」

いつの間にか石室中央の金属レバーに手を掛けたサルークが、おずおずと声をかけてくる。残り二人の部下の一方は肩を竦め、もう一方は正直過ぎるほどの好奇心を瞳に宿

していた。

先ほどのブルーデンスの呼び名についての軽口といい、どうにも不遜な部下達を咎めたかったが、これ以上時間を無駄にできない。

「ああ、頼む」

フォーサイスは様々な言葉を吞み込み、短く返事をした。了承を受けたサルークは、さっさとレバーを引く。

「ひえっ……！」

間の抜けたチェイスの声と同時に、足元から七色の風が吹き出す。あつと言う間に石造りの景色を染め抜いた虹色の光は、呪術のなせる業だ。七色の光の中で徐々に足先から分解されていく我が身に、フォーサイスも静かに息を呑んだ。

今まで様々な魔法を無効化してきた自分にとって、初めての他力転送は何の痛みも苦しみもなかった。ただ、不可思議としか言いようのない感覚はあった。

不意に左頬にこそばゆさを感じ、彼が視線を向ければ、風に巻き上げられた銀髪がなびいている。未知の光と風は短くなった彼女の髪をいとも簡単に攫い、俯きがちな首筋を露わにしていた。見え隠れする項は、栗立っている。

フォーサイスは無言で彼女の腰に腕を回し、引き寄せた。口では気丈なことを言っ

いたが、やはりその身体は硬い。

「ちよっ……！」

「少しの間、掴まらせろ……こういう移動は初めてで、落ち着かん」

咄嗟に抗おうとしたブルーデンスのつむじに唇を寄せて囁くと、その身体から力が抜けていく。虹に呑み込まれ、完全にその身が消え去るまで、フォーサイスは彼女をずっと抱きしめていた。

「これ、ホントに着いてんのか？」

「……さあ、オレには何か変わってようには見えませんが」

程なくして、ライサチエツクの疑問に答えるチェイスの声が耳を衝いた。フォーサイスはいつの間にか閉じていた目を開く。ブルーデンスがきちんと腕の中にいることにホッとした後、彼はようやく辺りに目を遣った。

確かに自分の目にも、柱の形や刻まれた文字まで、この八角形の石室はワードローブの床下の景色と何一つ変わらないように見える。

けれど、サルークにとっては違ったようだ。

「そんなことはない。石柱と床板の材質、装飾もまったく違う。宮廷医邸の床材は花崗岩だったが、こちらは大理石だ……つまり、無事着いたということだ」

裏社会に生き、古今東西の美術品の真贋を見極めてきた元義賊の彼は、ずば抜けた記憶力と審美眼を持っている。サルークがそうだとするのなら、この場所は先ほどとは違う場所なのだろう。

「あの……大丈夫ですか？」

おずおずと問いかけてくる声に、フォーサイスは隻眼の部下へ向けていた視線を腕の中に戻す。愛しい銀色の瞳が、自らを見上げていた。

顔色も悪くなく、特に不調の影は見えない。彼は内心胸を撫で下ろした。

「ああ、助かった」

「いえ」

少々の未練を覚えつつも細腰から腕を解くと、ブルーデンスは短く返事をして距離を取った。慌てて顔を背けたせいで銀髪が揺れ、まだ薄紅色をした項が彼の目に触れる。

フォーサイスは物憂げに眉を顰めた……ここがダグリード邸の私室であれば、迷わず抱き寄せ、組み敷いただろうに。

「あーもうやってらんねえ！ マジでいい加減、仕事しろ！」

「ええっ、後もうちよっと……痛え！ 何で殴るんですか、サルークさんまで！」

「馬鹿野郎、言葉を慎め！ 俺は子供達を残して死にたくない！」

彼らの言葉を聞いたブルーデンスは、さらに慌ててフォーサイスから距離を取った。
 ——こいつら全員、戦いが終わったら懲罰房行きだな。
 職権濫用かつ八つ当たりも甚だしい処罰を心に決めた鬼隊長だった。

4

宮廷内の廊下には、誰一人として姿が見えなかった。

非常事態宣言が正しく発令されているならば、王族を含めた城内の者達は大広間に集まっているはず。ブルーデンス達は、緊急時の集合場所であるその部屋に向かった。

オックス達遊撃隊の活躍もあって、城を覆う魔障壁はまだ健在だ。しかしながら、五千のサクリファ兵達に対し、精鋭揃いとはいえ、隊員達の数はその百分の一にも満たない。

いずれ結果は破られ、サクリファの軍勢が宮殿内へ押し寄せてくるだろう。彼らが時間稼ぎをしてきている間に、城内の人々を城から連れ出すことが最優先だ。余計な考えに囚われている場合ではない。

中庭に面した廊下の角を曲がると、金の縁取りが豪華な大広間の扉が見えてきた。その前には、二人の近衛師団員が立っている。中に国王夫妻と二人の王子がいる証拠だ。

ブルーデンスはそう確信して、ようやく人心地を得た。

近づく自分達の姿を認めた彼らの表情に、驚きと安堵、そしてわずかな疑念といった感情が過ぎった。自らに集中する視線に、ブルーデンスの鼓動が逃る。

かつてフォーサイスと二人寄り添って入った大広間を前に、当時を凌駕する緊張感に襲われた。今の自分からは、すべての嘘が取り払われているのだから。

「……いいな、ブルーデンス」

前を向いたまま投げしてきたフォーサイスの声は、彼女のざわつく心を緩やかに解いてくれた。物理的な距離はあのとより離れていても、今は彼がびつたりと心に寄り添ってくれていることを実感できる。

「私はもう立ち止まりません」

ブルーデンスもまっすぐに前を見据え、フォーサイスの言葉に応えた。

これ以上、何も恐れることはない。手を伸ばすことさえ諦めていた唯一無二の存在が、本当の自分を認めてくれているのだ。

二人の後ろに続くライサチエック達も軽口を封じ、満足そうな笑みを浮かべていた。

「お前達、状況は……陛下はご無事か？」

「雷龍隊のダグリード隊長ではありませんか……！」

「魔障壁が作動しているはずです！ 一体、どうやって中につ……？」

目前までやって来たフォーサイスに向けて、扉を守る近衛師団員達は矢継ぎ早に質問を投げってくる。質問に答える余裕もない彼らは、見ればまだ年若い。経験の浅い少年兵が見張りに立っているということは、非常時にきちんと指揮の執れる年長者が不在なのだろう。何の前触れもない魔障壁発動のせいで、鉄壁の守りの利点を活かせず、退路を断たれた欠点ばかりが働いているようだ。

それでも、縋るような彼らの双眸は、まだ絶望はしていない。フォーサイスが口にした「陛下」という言葉にも薄暗い反応はなかった。国王を始めとする王族達も、今のところ無事に違いない。

「大丈夫だ、すべて承知している。我々は騒動の収拾にきた」

揺れ動く少年兵の目をまっすぐに見据え、フォーサイスは一言一句ゆつくりと伝える。

「事態の説明と今後の対処を陛下に進言する、扉を開けてくれ」

「はっ、ただちに……！」

自信に満ちた言葉を聞いた彼らは、即座に最敬礼をした。ブルーデンスに対する詮索

や、余計な疑問を胸に仕舞い込んで、フォーサイスの命に従う。その顔つきは、悪夢から覚めたようにすっきりしたものに変わっていた。

彼らがもつとも欲していたのは、冷静に指示を出せる指揮官だったのだ。フォーサイスはわかりやすくそれを示し、近衛師団員達の心に平静を取り戻させた。改めて彼は人の上に立つ人間なのだと、ブルーデンスは実感した。

大広間に足を踏み入れると、かつてと同じように人々の視線が一斉に自分達へ集中する。扉に近い位置から部屋の奥に向かって数十人の近衛師団員、次いで使用人達、文官、上級武官と並んでいる。壁のように立ちはだかる彼らの奥に、国王夫妻と王子達がいるのだろう。

先頭のフォーサイスを目にした人々は一瞬ざわめき、次いで一様に安堵した空気が流れる。だが、後に続くブルーデンスに気付くと、それが驚愕と疑念の眼差しに変わった。

「フォーサイス……！」

人々が騒ぎ出す前に、部屋の最奥より声が届いた。人の波が左右に分かれ、国王リカルドが足早に歩み寄ってきた。

「ご無事で何よりです、陛下」

「そなたもな。よくここまで来られたものだ」

その場に膝をつこうとした五人を制し、国王は感嘆を込めて労いの言葉を口にする。フォーサイスの後ろに控えるブルーデンスの姿は、リカルドに疑念をもたらしただろう。髪や瞳の色は違っている、その容姿は見間違えようがない。

しかし、そこは聡明な国王のこと……直接問い質すようなことはせず、ふつくらしとした容貌に不似合いな鋭い双眸でブルーデンスを見つめてくる。一挙手一投足のすべてを見逃さぬように。

「陛下には、第一にご報告したいことがございます。サザール殿下はご無事です。ダグリード邸へ宮廷医ヒラルダとともに見え、緊急事態をお知らせくださいました」

「おおつ、それは何よりの知らせ！ そうか、無事だったのか……あの子の奇矯な振る舞いには常々悩まされていたが、こんな時に役立つとはな」

フォーサイスからの朗報に、リカルドは父親の顔を覗かせた。

国王としてはなく一人の父親として、所在のわからなかった末の王子の安否が一番の懸念事項だったに違いない。

「して、城下の状況は？ 斯様な事態にさぞ混乱しておるだろうに……」

「いえ、まだ城の外には伝わっておりません。サザール殿下自ら、目眩ましの結界を張ってくださったので」

「結界？ ヒラルダではなく、あの子が……？」

フォーサイスの言葉に、リカルドは不可解そうな表情を浮かべた。

「それについては、こちらに控える私の婚約者ブルーデンスから説明を……この姿を見て、お気付きになられたかもしれませんが、彼女は私のかつての副官ブルースです」

「長きにわたり陛下を欺いてきたこと、心よりお詫び致します」

ブルーデンスはその場に膝をつき、頭を垂れた。周囲の人々の動揺が、肩に重く圧しかかる。

しかし、それに押し潰されるわけにはいかなかった。ようやく与えられた告解の機会……過ちを赦されたいわけではない。ただ、この先に進むための道がほしかった。

「罪深き身でありながら陛下の御前に参じましたのは、内乱の首謀者が私の父……リユーノ・フカッシャーであると告げるためにございます」

ブルーデンスの言葉が終わる前に、控えていた近衛師団員達がリカルドの前に出る。それまで痛いほどだった沈黙は破られ、不安、驚愕、恐怖、苛立ち、怒り……あらゆる負の感情が渦巻く悲鳴が上がった。

整然と並んでいた列は乱れ、広間は狂乱に支配されていく。フォーサイス達に向けられていた安堵と期待が、瞬(たち)間に鋭利な悪意と非難に変わる。大理石の床に視線を落としたまま、ブルーデンスは拳(こぶし)をきつく握り締めた。

「静まれっ、今は罪過(ざいご)を問うているときではない！……先を続けよ、ブルーデンス」
国王は、場の混乱に一声を投じた。

「陛下っ、お下がりでござい……！」

「控えよ。余の判断に異を唱えるつもりか？」

一歩進み出てリカルドを止めようとした一人の近衛師団員を、国王が咎(とが)める。その言葉聞き、ブルーデンスは弾かれたように顔を上げる。

「だっ、断じてそのようなことは……！」

「わかつておる、そなたは職務に忠実なだけよ。わかつておるから、そう無駄に騒ぎ立てるな」

近衛師団員を軽く宥(なだ)めた後、ブルーデンスを見返したりリカルドの目に、先ほどまでの鋭さは無い。

「その腰に帯びた大剣は、我が国の至宝ロードピース……フォーサイスの父アスターを、元帥(げんすい)に任じた折に先王が授けたものよ。前の戦争で主が亡くなり、一度は王家に返納さ

れたが、雷龍隊隊長に任じたときに、余が再びフォーサイスに授けた」

「お気付きくださり、光栄に存じます」

フォーサイスはそう言って頭を下げ、ブルーデンスの隣に膝をついた。彼女がその意図を問うように彼に視線を移すと、ことさら優しげな眼差しが待っていた。そんな上官達の姿に、ライサチェックとサルーク、チェイスも倣(なま)う。

「気付かぬものか。ダグリード侯爵家当主が『アイリスの剣』と呼ばれる由縁(ゆゑん)であるロードピース、亡き父の形見でもあるそれを預けるは、己(おの)が命を預けると同じ……そなたが斯程(かほど)の信頼を置く者の言葉は疑えぬ。ブルーデンス、話を続けるがよい」

四方八方からの容赦ない視線を一蹴(いっしゅう)したりリカルドの言葉に、ブルーデンスは胸を詰まらせた。

国王からその言葉を引き出したのは、自分ではない。国王の利器は元より、フォーサイスがその人格と実績で獲得した揺るぎない信頼の賜物(たまもの)なのだ。またしても守ると誓った彼に助けられてしまった。

「寛大なお言葉に感謝致します。今は詳細をお話している時間はございませんので、事実のみを……行方不明となっている大多数の騎士達は今、私の両親によってサクリファを埋め込まれ、その意思と関係なくこの城を攻めております。私はリユーノが引き起

こさんとする、第二のクラウディアの悲劇を防ぐために参りました」

今一度深く頭を垂れ、ブルーデンスは告白を再開した。

しかし、その告白は再び第三者の声で遮られる。

「リユーノはっ……クラウディア皇帝に成り代わらんとしておるのか！ 彼奴め、何とおぞましいっ！」

「……ウォルグンデ、閣下」

フォーサイスは声の主に目を向けると、忌々しさを噛み殺したような声音で、その名を呟く。巨体を揺らしながら、人の波を乱雑に掻き分け向かってくる老人……藤黄色の長いローブを纏った脂肪質な男は、漆国アイリスの宰相ソモール・ウォルグンデだった。「陛下、わたくしは敢えて進言させて頂きます。この者の言葉を易々と信じてはなりません！ よくご覧下さいませ。如何にも自らは無実だ、被害者だと言わんばかりの取り纏りよう……この非常事態とダグリード侯爵家への過度な信頼が、常にはご聡明でいらつしやる陛下のご考量を鈍らせているのでございましょう。この汚らわしき国賊は、オルガイムの種族特性を利用して女人禁制の騎士団に入り込み、長きにわたり陛下を謀つておったのですぞ。女の性を利用して、ダグリードも籠絡したに違いありますまい！ 目も髪も死神のごとき薄気味の悪い銀色なれど、その造りは人形のように美しい……い

いやや、それさえきつと紛い物……フカツシャーが送り込んだ間諜に相違ない！ だからこそ魔障壁の中にも侵入できたのだっ！ この穢れた死神女は、陛下のお命を狙つておるのです！ お下がりにください、早くっ！ どうぞこの老体を、陛下を逆賊の凶刃よりお守りする盾に……！」

福々しい国王さへ隠れるほどの弛み切った体型で、身振り手振りを交え、唾まで飛ばした熱弁……聞くに堪えない内容はさておき、よく息継ぎもせず最後まで言い切れたと別の意味で感心する。

近衛師団員との間に割り込んでリカルドを庇う様は、実には大仰で芝居がかった。

「下がれ、ソモール……そなたは余の判断を信用できぬと申すか？」

眉間に皺を寄せ、不快の色を滲ませたりカルドが咎める。

「滅相もない！ ただっ、陛下が信頼を置かれるには、この汚らわしき間諜はもちろんのこと、ダグリードも若過ぎると言っておるのです……高潔な魂も、若木のうちは善悪が何たるか、真に理解するには至らぬゆえに」

非難は覚悟していたブルーデンスだったが、ウォルグンデの言葉は度が過ぎていた。自分だけならまだしも、目の前の国王とフォーサイスの名誉を著しく傷付けている。そのことに気付いていないのは、ウォルグンデ本人だけだ。

咄嗟に顔を上げた彼女と気色ばむ部下達を制し、フォーサイスが立ち上がる。

「陛下、確認しておきたいことがあります」

険しい表情で前を見据え、彼は口を開いた。それはリカルドに向けた問いかけだったが、その抜き身の剣のような気迫に圧され、王の前に立つウォルグンデは数歩後退る。

「如何なることか？」

「ロードピースを賜ったとき……共に授けて下さったお言葉は、今も有効でしょうか？」

国王は、受け止めた言葉に小豆のように小さな目を見張った。

「有効も何も……いつ何時も如何にして承諾させるかと、考えあぐねておったのだ。今も昔も、そなた以外に任せられる者は考えられぬのだから」

呆氣にとられたような表情のまま、リカルドは頷く。ブルーデンスは突然の発言の意図がわからず、不可解そうな眼差しを彼に注いだ。

「ありがとうございます。これより騎士団及び近衛師団を含め、すべての武官は我が指揮下に入る。宰相閣下と言えども、私の命令に拒否権はない」

フォーサイスが言い放った言葉は、予想だにしないものだった。

「なっ……！ ダグリードっ、この若造が、気でも狂いおったか！」

ウォルグンデは、真っ先に罵声を浴びてきた。それまで辛うじて保っていた慇懃さ

も剥げ落ち、下卑た本性が顔を覗かせている。不健康に黒ずみ、むくんだ顔は、さらに赤黒く染まった。

「まだお気付きになりませんか、閣下？ たった今、私は陛下より元帥を拝命したのです。ご存知の通り、戦時下で元帥の命は絶対。決してこのような言い方をしたくはありませんが……戦場に老いぼれた文官の出る幕などない」

最後に投げられた言葉は、恐ろしいほどの切れ味でもって、老宰相の二の句を切り裂いた。ウォルグンデは唇を戦慄かせ、まるで陸に打ち上げられた魚のような無様な形相をしている。

「ソモールよ、鬼神の逆鱗に触れるとはな……同情もできぬわ。大体、若木は老木などすぐに追い越すものだ。それに気付けぬとは、愚かしいにも程がある」

そんなウォルグンデに対し、リカルドはため息交じりの呆れ声を投げる。

「陛下、そんなっ……わたくしは陛下を、この国のために思いつ……！」

「いい加減にしろ、虫唾が走る。政務は優秀な補佐官に丸投げし、私腹を肥やすことのみ精励してきた輩がよくもぬけぬけと……証拠が揃うまで摘発を控えていたが、お前が領地で無許可に栽培するシェブローのこと、気付いていないと思っていたか？」

フォーサイスの一喝に、ウォルグンデは絶句する。

シエプローの花弁や蜜からは、良質な火薬が精製できる。火薬を製造する目的で育てる場合は国の許可が要り、栽培面積も定められていた。不正に栽培すれば厳しい処罰を受けることになる。国政に携わる者が、その事実を知らぬはずはない。

「それは初耳だの」

口調こそ変わらぬものの、氷のようにひやりとした声音で、リカルドは嫌疑の主に語りかけた。

「こつ、こここつ、これは、いつ、陰謀です！ フカッシャーとダグリードは結託して、わたくしを陥れようとしておるのです！ ご聡明な我が王なれば、おわかりになるはずです！ フカッシャーもダグリードもアイリスの双壁と呼ばれようが、所詮は粗野な軍人、成り上がり貴族……国家を守護する誉れ高き騎士団法を曲げ、無知蒙昧な民草や貧民街の賤民などを配下とする危険思想のダグリードと、由緒正しきウォルグンデ公爵家の当主たるわたくしの、どちらを信用なさるおつもりか……！」

己が不正から衆目を逸らすため、ウォルグンデはまたも侮辱の矛先をフォースイスへと転じようと醜い長口上を重ねる。さすがにもう黙っていられず、ブルーデンスはロッドピースに手をかけ、その場に立ち上がった。

「ミセッティア暦十一年エイダの月に、トルマスへ五千キリング」

突如、背後から何の脈絡もない言葉が飛んできた。彼女が振り返った先に立っていたのは、サルークだった。

「グラミスの月に、モレネへ三千。サスキアの月に、カラズスへ六千、ザラへ三千。アルミナの月に、マントルへ六千。バリユファスの月……」

報告書を読み上げるような淡々とした口調で、彼はなおも続ける。

「でつ、ででで、でたらめを……」

ウォルグンデは悲鳴にも似た甲高い声で、サルークの言葉を遮った。厚ぼったく濁った目を泳がせる宰相の額には、見る間に大粒の汗が浮かぶ。薄い頭髮と絡んで、まるで湿地帯のようだ。

「それは真にでたらめか、ソモール？」

激しく動揺する宰相に対し、福々しい身体ごと向き直ったリカルドは、念を押すように尋ねた。

「ははっはい！ 当然ではございませんか、そのような大それたことを……！」

「左様か……して、何がでたらめで、何が大それたことなのだ？ そこな者は五年前の暦と地名、数字を口にしただけぞ。トルマスは海港国リゾナの国境都市で、カラズスは熱晶国ヴェンダントの城塞都市であらう。大した技術と販売網よのう、ソモール。余の

記憶が定かであれば、製造量、取引ともにその年の公式の二倍じゃ」

王の言葉に、宰相の顔からは完全に色が失われた。要らぬ功名心を出したせいで、シエブロー火薬粉闇取引の事実が衆目に晒されたのだ。

「そんなん、馬鹿な！　なぜ五年前っ？　そうか、貴様はあのときの……！」

性懲りもなく言い逃れをしようとするウォルグンデは、何かに気付いたようにサルークに目を向けた。

「悪あがきはそのままでにしろ、ウォルグンデ！」

脂肪の塊のような指をサルークに突きつけ、がなり立てようとした老いばれを、フォーサイスが遮った。射抜くような視線を受けたウォルグンデは、ヒツと短い悲鳴を漏らす。「我ら騎士団が国家の庇護者……それは正しい。だが、国家を構成しているのは一握りの王侯貴族だけではなく、大多数の市井の人々だ。賤民などと呼ばれる人間は、一人も存在しない。貴様が悪銭で肥え太る間にも、このサルークを始め部下達はアイリスのために血肉を削って戦ってきた。そんな彼らを愚弄することは、俺が許さん」

フォーサイスがそう言い終えると、辺りは水を打ったように静まり返っていた。大広間に交錯していた雑多な感情は、ただ一つの怒りに集約され、ウォルグンデに向けられている。

「先ほどサルークが述べた言葉は、氷山の一角だ。陛下もおっしゃった通り、今はその罪過を問うている場合ではないが、ソモール・ウォルグンデ……此度の内乱が収まった折には、覚悟しておけ」

駄目押しするようにフォーサイスが付け加えたのは、明らかに最後通牒だった。もはやただの咎人となった男は、文字通りその場に崩れ落ちた。

「目障りだ、廊下に放り出せ」

「はっ！」

元帥として初めて発した命令に、周囲を取り囲む近衛師団員達は即座に動いた。ウォルグンデは両脇を抱え上げられ、そのまま大扉から連れ出されていく。

部下を辱められた怒りをきっかけに、発露した圧倒的な指揮官の資質……それをもつて、彼は居合わせたすべての人々の心を掌握したようだ。

「出過ぎた真似を致しました、陛下。そして、話の腰を折って悪かった、ブルーデンス。障害は排除した、続けろ」

フォーサイスは再び傍らの彼女に振り返り、つい一瞬前までと本当に同一人物かと思うほどに穏やかな口調で促す。

目まぐるしく変わる展開に、ブルーデンスの思考力は完全に凍結していた。すぐには

頭を切り替えられず、彼の優しい眼差しをただ受け止める。

薄暗い過去の暴露を免れたサルークに、口を挟む余地がなかった残りの部下二人も、呆けたように固まっていた。

「此度の本当の功労者は、他の誰でもないそなただな」

ブルーデンスを見てそう呟いたりカルドの言葉の意味は、まだ彼女には理解できなかった。

5

王城ディオランサを覆う魔障壁への人間砲弾は、絶え間なく続いていた。

メイスの指揮の下、兵士達は胸壁の見張り窓に張りつき、弩を構えている。宙を染める血や、襦袢衣のように落下する同輩の骸にさえ動じぬ襲撃者達……小さな窓の向こうで繰り広げられる惨劇が、徐々に部下達の精神を蝕んでいた。

宮殿の中にいる国王夫妻や、年若い王子達は大丈夫だろうか？

城内に、近衛師団員達は一切とれだけ残っているのか？

そして魔障壁が破られた後、この手にある剣や弩が、このサクリファの軍勢を相手に、脅威となり得るだろうか？

もっと早くにリユノ・フカッシャーの野望に気付いていれば……何度目ともしれない後悔が、メイスの胸を衝く。

『……うおおおおおおああああ……うううう……』

不意に魔障壁の向こう側から獣のような怒号が上がり、何かが破裂するような甲高い音が周囲に響いた。巻き起こる爆煙、爆風に煽られ、目の前の景色が蜃気楼のごとく揺らぎ……次いで、恐るべき速度で金色の光が、半円状に王城を覆っていく。

そして次の瞬間、その眩い光で形成された円蓋は、砂金のように煌めきながら崩れ落ちた。同時に胸壁の見張り窓から襲った爆風に、隊員達の身体はなす術もなく吹き飛ばされる。

「ああああああああ……うううう……」

焰を孕んだ熱風をまともに浴びた彼らは、石畳の上にもんどり打って倒れ、転げ回った。やや後方に立っていたメイスも、防備もなく弾き飛ばされ、外庭の芝に背中から叩きつけられる。肺に溜まった空気を無理矢理吐かされ、しばらく息も吐けなかった。